Retro-Future

古くて新しい　もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今回は英国Leak社のコンパクトなプリアンプとパワーアンプを紹介しよう。

本文／**林 正儀**

製品解説／岡田圭司（アトリエJe-tee代表）

撮影／小林幹彦（彩虹舎）

第39回 Leak／LEAK Point One Stereo

Leak　Leak 社は英国で1934年にハロルド・リーク によって設立された会社。設立当時は業務用のアンプをメインに作っており、戦後すぐにタイプ15という歪率が0.1%という当時としては画期的な高性能のアンプを開発している。1948年にはタイプ15を改良したTL-12を開発。このアンプの性能もすばらしく歪み率は10W出力で0.03%と驚異的だった。1950年頃から英国BBCのスタジオ用モニターアンプとしてBBC製 LS/1スピーカーに搭載されている。コストパフォーマンスも高かったためこの後に世界的なベストセラーアンプとなり、ヨーロッパやアメリカでも数百台がプロの現場で使われていた。

LEAK Point One Stereo

1960年代後期に生産された管球式ステレオパワーアンプの最終型。1950年代に入って生産され始めた頃のアンプパネルはプラスチィック製だったが、かなり後期になってから金属製のパネルになる。回路設計はほとんど変わらないが、ボリュームやスイッチなどが少し変更され、ノブの作りも重工感がある。デザインも当時アメリカで主流となっていたミッドセンチュリー的な洗練された美しいデザインとなっている。

見かけと違いレトロな音でない 隠れ銘機のニオイが存分に漂う

リークの名前はちらほら耳にすることがあったけど、実際にちゃんと聴いたのはつい最近のことだ。

あるマニアの家へ行ったとき、ウェスタンエレクトリックの13Aホーン・システムに繋げていた。人が入れるような巨大ホーンにもかかわらず、艶やかなヴォーカルの像はキュッと締まっていて、これがかなり印象的だった。

アンプがその音にどこまで貢献しているか定かでない。だが話題になることが少ないメーカーだけに、隠れ銘機のニオイは存分に漂ってきた。

今回はそのリークがテーマになる。いつものようにアトリエJe—teeに行くと岡田さんは「2回に分けてじっくり聴きませんか」と提案があった。

まずはプリアンプのポイント・ワン・ステレオとモノブロックのパワーアンプTL—25を組み合わせる。次号では、モノのプリアンプ2台を使ってステレオにして聴いてみる寸法だ。

タンノイ10インチ同軸モニターレッドを国産エンクロージャーに入れたスピーカーを岡田さんは選んだ。

ここで敢えて15インチにしなかったのはナイス・センスだろう。小振りのアンプと10インチのコンビで聴くのが正しい世界だと思う。15インチでは背伸びしているようで、スタイルとして野暮ったい。

小手調べに定番中の定番オスカー・ピーターソン『プリーズ・リクエスト』がかかった。ビートのバウンドがしっかりしていて、トリオが生き生きしている。イギリス製独特のウェット感がありつつも、どことなくパリッとしている。

「タンノイでもこれだけジャズが鳴っちゃうんだよね」

岡田さんはそんな言葉を漏らしつつ、ナット・キング・コールの「スターダスト」を続ける。高級羽布団にくるまれたような気持ちよさ。歌のバックのストリングスが特にふんわりと拡がる。

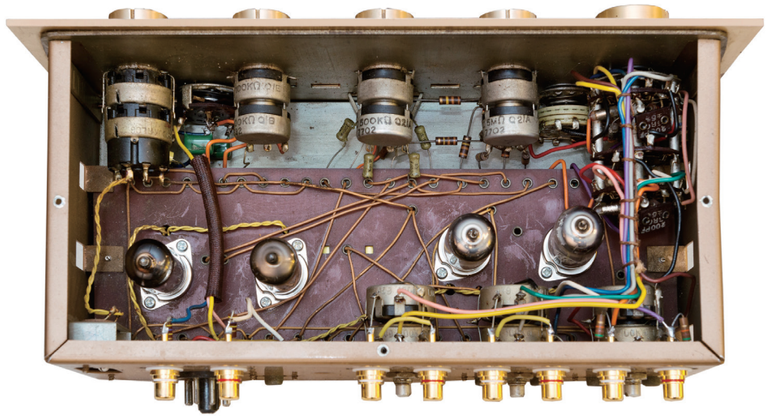
ウィリー・ボスコフスキー指揮ウィーン・モーツァルト・アンサンブル「セレナード 第13番」。手入れの行き届いた庭を見回すような音景が拡がる。それは決して大庭園ではないけれど、ちょっとここがと気になるような難点がない。いいところでけじめがついている。

最後に新しめの録音でレイ・チャールズ&ナタリー・コールの「フィーヴァー」。ミッドレンジの密度が高くメリハリがある。見かけと違いレトロなサウンドではない。

「リークのライバルといえば、同じイギリスのクオードなんですけど、日本と違ってアメリカではリークファンのほうが多いように思いますね」

なるほど先のマニア宅でリークとウェスタンの相性がよかったのもわかる気がした。快活な目差しを感じる微妙なニュアンスがちょうどいい具合なのだ。

「Leak Point One Stereo」の正面パネル。左から大きなツマミが入力セレクター、Bass、Treble、Balance、Volumeの順。下の小さなツマミに関しては、左側が Mood (mono／Stereo)セレクター、右側は Rumble filter



「Leak Point One Stereo」の 内部。真空管は EF-86 が4本使われている

コンパクトなモノラルパワーアンプ「TL-25 Plus」。1951年に開発されたプロ用パワーアンプ TL-25-Aの改良型で、コンシューマー用途をメインとして開発されたと思われる。トランスは英国で有名な Partridge 製。出力管は KT-66が2本で、整流管は GZ-34が1本。増幅段にはEF-86が1本と、ECC-81が1本搭載されている

電源トランスの対応電圧切り替えプラグ

アウトプットトランスのインピーダンス切り替えプラグ

対応真空管の表示。このアンプはシャーシの真空管の表示の部分に KT-66、5881、EL-34 とあり、同じ真空管がペアチューブならそのまま入れ替えることが可能で、それぞれ違った音色が楽しめる

取材協力：アトリエJe-tee　〒153-0064　東京都目黒区下目黒3-24-14＃701　☎03-3715-5336　ホームページ：http://www.je-tee.com

Retro-Future

古くて新しい　もうひとつのヴィンテージオーディオ

ヴィンテージといえば、アルテックやタンノイなどが誌面に取り上げられる機会が多い。しかし、当時これらの老舗と肩を並べる、他の多くのブランドがあったことを知る人は少ないだろう。ビンテージ・ショップ「アトリエJe-tee」では、音質はもちろん、デザインにもこだわった「もうひとつのヴィンテージ」を数多く紹介している。本企画では、同店で販売されている製品を中心に、毎号テーマとなるブランドを取り上げている。今回は前回に引き続き英国Leak社の製品が登場。コンパクトな初期と後期のモノラルプリアンプを紹介する。

本文／**田中伊佐資**

製品解説／岡田圭司（アトリエJe-tee代表）

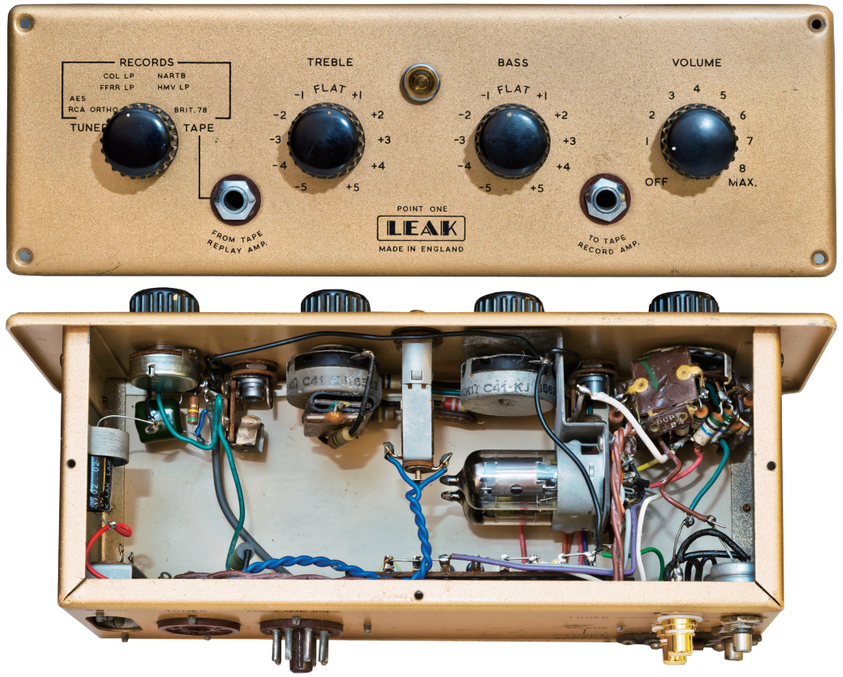
撮影／小林幹彦（彩虹舎）

第40回　LEAK Point one Pre-amp

Leak 社で1950年頃に開発されたモノラル仕様アンプのTL-12は、英国BBCのスタジオモニタースピーカー専用アンプとしても使用されることとなる有名なアンプ。そしてこの頃には、パワーアンプから電源供給される設計の小型プリアンプがセットで開発されている。モノラル、ステレオそれぞれの時代にスタンダードな Poin-one タイプ、イコライザー回路が強化された Varislope タイプの2機種が発売された。それぞれ初期型、後期型モデルが存在しており、とてもシンプルな操作性と洒落たデザインが目を引くアンプだった。

LEAK Point One 初期モノラルモデル

1940年代後期に生産された初期型モノラルプリアンプ。正面パネルは最小限の操作に必要なメインボリューム／電源スイッチを兼ねた入力セレクター、高域トーンコントロール、低域トーンコントロールノブの4個が付いているシンプルな設計。後ろのパネルはフォノとライン入力のみサブボリュームが付いている



Point One mono 初期モノラルモデルの正面。パネルの材質は金属製で正面ツマミの左から入力セレクターの（Phono は4種類のイコライザーが設定されている）、Treble、Bass、メインボリューム、その他にTAPE専用の入力、出力専用ピンジャックが設置されている

本機の内部。真空管はEF-86が2本搭載されている

プリもモノ化するとここまで違う 洗練された箱庭サウンドがお洒落

リークのアンプを聴く後編は、モノラル時代のプリアンプを左右モノブロックに配してステレオ音源を聴いてみる。パワーアンプも同じくモノのTL-25だ。

前編で聴いたプリアンプ、ポイント・ワン・ステレオの音も十分よかった。スピーカーは国産エンクロージャーにタンノイ10インチ同軸モニターレッドを入れたものだが、程がいい粋な音だった。さて今回はどうだろう。

まずは50年代製造と思われるモノプリでレイ・チャールズ&ナタリー・コールの「フィーヴァー」を聴く。

プリアンプに限らずモノ時代の機器をペアにしてステレオ音源を聴く場合、左右の個体差が気になるところだ。聴感上はまったく違和感がなく揃っていた。そして前編で聴いたステレオ版よりもやはり左右のセパレーションが良好。音場が一回り広い。

押し出しの力強さも確実に増した。パワーアンプならわかるが、プリでもモノ化するとこうも違うものかと舌を巻く。リークの洗練された箱庭的サウンドがお洒落だなあと思っていた僕は、ここにオーディオ的な面白さも見いだすことができた。

続けてウィリー・ボスコフスキー指揮ウィーン・モーツァルト・アンサンブル「セレナード 第13番」の大きなスケール感を味わう。プリアンプのスマートな見た目と出音にギャップがあって不思議な感じすらしてきた。

次はさらにもっと古い40年代に製造されたモノプリを試す。

同じく「フィーヴァー」を聴くと、もう一段濃厚になった。ワイルドでスモーキー、野太いといった印象。ハイフィデリティではなくちょっとした演出をそこに感じる。

レイ・チャールズはともかくとして、ナタリー・コールの声はもっとピチピチしているはずという突っ込みはあるのだろうが、僕としては透明感よりもソウルを歌声に求める口なので、感覚的にはこちらのほうが気持ちいい。

往年のジャズ、たとえばオスカー・ピーターソンの音質チェック定番曲「ユー・ルック・グッド・トゥ・ミー」はベースがブリブリと走っていたが、ウェス・モンゴメリーのCTI録音はギターがモッコリして精彩に欠けた。このプリは微妙にソースとの相性があるようだ。

リチャード・タニクリフの「バッハ無伴奏チェロ組曲」は新しい録音ではあるけれど、波長がばっちりうまく合った。陰影感を秘めながら朗々とスピーカーを歌わせる。10インチタンノイの力を出し切ったパフォーマンスだった。

新旧プリはどちらが好みかと問われれば、僕は迷わず古い方を選ぶ。万能ではないが、ジャンルや録音によってこちらからツボにハメていく聴き方をしたい。それと童顔の風貌が妙に可愛らしい。

Point one Plus 後期モノラルモデルの正面。パネルの材質はプラスチック製で正面ツマミの左から（Phono は4種類のイコライザーが設定されている）、Bass、Treble、Filter（高域ノイズカットフィルター）メインボリューム、その他にTAPE専用の入、出力ピンジャックが設置されている

本機の内部。真空管は EF-86が2本使われている

取材協力：アトリエJe-tee　〒153-0064　東京都目黒区下目黒3-24-14＃701　☎03-3715-5336　ホームページ：http://www.je-tee.com